

Title	レニングラードにあるチベット文字轉寫法華經普門品(續)
Author(s)	高田, 時雄
Citation	内陸アジア言語の研究. 7 p.13-p.42
Issue Date	1992-05
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/17290
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

レニングラードにある チベット文字轉寫法華經普門品 (續)

高 田 時 雄

目 次

一 緒 言	
二 寫本概観	
三 テキスト	
四 索引二種 (以上前號)	
五 音韻史的考察	
聲母.....	13
韻母.....	23
六 チベット語歸敬文...	38
七 結 語.....	40

五 音韻史的考察

以下まず各漢字の聲韻母がチベット文字でどのように寫されているかを具體的に見ることにしよう。個々の扱いの検討には他のチベット文字轉寫資料と比較する必要があるが、紙數の関係で詳しくこれを行えない。拙著『敦煌資料による中國語史の研究』の該當箇所を參照願えれば幸いである。

[聲母]

牙音

○見母 (*k-) に屬する40字98例は、チベット文字 k-で寫されるのが普通であるが、g- が用いられる場合も若干存在する。それらは、迦 ge (22...出現行數を示す、以下同じ)、gye (10)、居 gyi (04, 07)、觀 gwan (35)、gwan (46)、軍 gyung (49)、過 gwa (31)、見 gyen (31)、卷 gyan (61)、救 gyi (44)の8字11例であって、前4字が平聲字、後4字が去聲字である。そのうち平聲字の迦、觀、軍にはまた k- による對音も出現する。しかし全體として見れば、他

のいくつかの藏文轉寫資料に見られたような

漢語の *k- $\left\{ \begin{array}{l} \text{.....チベット文字の k- (平, 入)} \\ \text{.....チベット文字の k-/g- (上, 去)} \end{array} \right.$

という分布は見られない。したがってチベット文字の有聲／無聲の対立によって漢語聲調の差異を表現しようとする明白な意圖は觀察しえないと言ふべきであろう。「解」字が he (38), ke (17) 二様に寫されているのが注意される。前者は「解脱」の語に用いられているのに對して、後者は「寶珠嬰珞を解く」という動詞に用いられている。「解」には匣母の音もあるが、しかしこの兩例はともに見母の音に讀むべき場合である。ただ「解脱」に關しては、Kや TD といった資料には k- で表記してあったものの、NT・FP では h- で寫し、「解脱」の場合匣母に讀むことのあったことが知られている。このテキストで「解脱」の「解」が he と書かれていることは、したがって、背景にある音系を考えるうえで重要な材料となる。

「降」が kjang(43)と書かれているのは奇妙な對音である。ka 字の下に書かれた ja は或いはyaかも知れず、その場合には kyang となる。江韻の主母音はeで寫されることも多く、前寄りの a であった可能性があるが、拗音にまで進んでいたことを示す資料は今のところ外にはない。しかし個別的には他の二等韻牙喉音で拗音化していた兆しがあり、まんざら不可能な解釋とも言えない。

剛 to(35) は不明。剛字は別に ko でも現われるので、これは何らかの誤りに違いないが、その原因については不明としか言い様がない。

故 bku (51, 53), 鼓 bku (43) などのb-を冠した例については後で一括して觸れるので、ここには扱わない。[k-: 82, g-: 11, bk-: 2, kj-: 1, h-: 1, t-: 1]⁽¹⁾

○溪母字は都合10字17例中、k- で寫すものが1例ある以外すべて kh- で寫される。困 ”i(44) は字形の類似から「因」に誤ったものであることが明白で

(1) 數字は用例の延べ數である。たとえば同じ文字「故」をkuと書く例が4回でる時、同じ文字であっても4となる。

あり、韻尾の -n が落ちているのは先行する「被」byi に釣られたものであろう。ちなみに臻攝の -n 韻尾脱落例は他にもある（盡dzi, 人 zhi）。[kh-: 15, k: 1, ”-: 1]

○群母字は誤讀の2例を除きすべてが g-（実際にはgy-）であって規則的である。誤讀と思われるのは、禁 lim(38) および巨 li(33) であるが、前者は音符の「林」を讀んだもので、後者は「呂」に誤ったものと考えられる。一體にこのテキストにはこの種の誤りが非常に多い。[g-: 15, l-: 2]

○疑母は單純な g- と 'a を前接させた 'g- という表記が相半ばする。他のチベット文字轉寫資料に見られるように、後者が [ʔg] を意圖したことは明らかであって、前接の 'a を付けない單純な g- はこのテキストの所々に觀察されるルーズな音寫と言ってよい。疑 tshi(51) は「癡」に誤ったものである。['g-: 9, g-: 11, tsh-: 1]

喉音

○曉母字は数が少なく計5字しか出現しないが、うち3字が正例のh-で寫される。他の2字は、蠟 khyar(41) と興 tying(32)である。前者のように kh-を用いる例は他の資料にも時に現われるもので、音の近似から有得べき誤りとは見做し得ても、そこに何らかの音變化を見て取れるような性質のものではない。後者は音からは説明が困難であって、おそらくはチベット文字の ty- と hy-の字形が割合に近いところから書き誤ったものと見做すのが正しいと思われる。[h-: 8, kh-: 1, t-: 1]

○匣母字は都合17字中、唯一例を除きすべて h- で寫されていて、問題がない。曉母の場合と同じく、'kh- で寫す例が一例見える（怙 'khu(52)）が、これも他の資料（DA）に例がある。曉母・匣母は全く同じ扱いで、おそらくは匣母の無聲化を反映するものと考えられる。[h-: 38, 'kh-: 1]

○影母は壓倒的多数が ”-すなわち "a-chen で表記される。このチベット文字の音價は普通に聲門閉鎖音 [ʔ] と考えられていて、漢語の影母字を表記する文字としては最も相應しいものと考えられる。例外的な對音としては畏を

yu (15) (他に "uの例もある), 依を yu (52) とするような y- を用いた例があるが, これはむしろ喻母 (以母・云母) の扱いであって, もちろん正例ではない。畏が shi (49) と書かれることについては誤讀であろうが, 何に誤ったものか不明である。このテキストの特異な扱いとしては惡を hag (46), 於を hi (23) とするような h- による影母の轉寫である。おそらく影母のかなり強い聲門閉鎖を表わす意圖で h- を用いたものと考えられるが, この兩字はまたそれぞれ正しく "ag (3 例), "i (4 例) と書かれているから, あくまで例外的な扱いとすべきことは言うまでもない。h- を用いた轉寫がコータン文字書寫金剛經に 2 例出現するもの⁽²⁾, チベット文字資料にはほとんど例を見ない。

["-: 70, h-: 2, y-: 2, w-: 1, sh-: 1]

○以母 (喻母 4 等) と云母 (喻母 3 等) は影母とは對照的に, y- で寫されるのを正例とする。"- を用いた例が, 以母に 2 例 (以 "i, 遊 "i) 云母は 1 例 (有 "i) 見られるものの極く少數に止まっている。以・云母の間には扱いに違いが見られないので, 兩者は合併して單一の喻母 /j/ になっていたと考えてよい。例外について言えば, 「雨」字を lo (43), lyo (49) としているのは「兩」字に誤って讀んだものであることが明白であるが, 「雲」を myi (43) とする理由は不明である。「雲」はこのテキストでも他の箇所では yun (48) となっており, これが正例である。[以 y-: 21, "-: 3, w-: 1; 云 y-: 19, l-: 2, '-: 3, "-: 3, m-: 1]

舌頭音

○端母字は合計 8 字 34 例あるが, 多數が t- により, 少數が d- により寫される。その少數例は, 頂 de (53) 多 da (61), 刀 do (37) であって, 見母の場合と同じく聲調を考慮した轉寫とは考えられない。[t-: 31, d-: 3]

○透母は 9 字, 例外なく th- で轉寫する。[th-: 16]

○定母は矢張り 10 字 30 例すべてが d- で寫して, 規則的な對應を示している。[d-: 30]

○泥母。開音節には 'd- (d-) を用い, 鼻音韻尾を持つ音節には n- を用いるという扱いは, このテキストでは例外がない。もとより音韻としては一個の

(2) 拙稿「コータン文書中の漢語語彙」, 『漢語史の諸問題』(京都, 1988), p. 100.

/ⁿd/ を立てれば十分である。釋 lug (61) のように泥母字を l- で寫す例は他の資料にも見られるが (O, Oa: やはり釋字の例), 調音點の近いことに由來する不注意な誤りであって、泥母と來母の相通を考えるべきではない。['d:- 2, d:- 2, n:- 25, l:- 1, m:- 1]

舌上音

○知母は4字すべてが c- で轉寫されており、ひとつの例外もない。[c:- 7]

○徹母は2例しかないが、ともに ch- で寫されている。[ch:- 2]

○澄母字は多數が j- を用いて寫すものの、池 ci (32), 長 co (03, 07), tso (03), 逐 zhu (35) のような例外もある。しかし特に説明が必要な對音とは言えない。[j:- 9, c:- 2, ts:- 1, zh:- 1]

○孃母は三十六字母中にこそ存在するが、普通には泥母と同一聲母であると見做され獨立した地位を與えられることが少ない。ただチベット文字による轉寫資料では 'j- で寫されるのが定例で、泥母の扱いとは異なる。筆者はこの扱いに立脚して、孃母を泥母から區別して /⁽³⁾dž/ を立てた。このテキストの對音、女 'ji (08), 'dzi (08), zhi (09), 尼 ji (25), 'dzi (07) もこれを支持すると思われる。ただし以上の舌上音の例はすべて三等の場合であって、二等は例がなく不明である。['dz:- 2, 'j:- 1, j:- 1, 'zh:- 1]

○來母について、舌音の最後に觸れておくことにすると、全部で19字21例が現われる中、一つとして例外なく l- で寫されている。[l:- 52]

齒頭音

○精母は ts- が正例である。c- を用いた例も若干數あるが、チベット文字の ts- と c- は區別が曖昧なことが多く、このテキストも例外ではないから、特にこの點にこだわることは無意味である。明らかな誤りについて言えば、宰を song (08) とし、遭を sung (37) とするのは、それぞれ宋、送などに誤ったものであろうか。かなり形が違うが、他に字形に近い文字で間違いを生じそうなものが見当たらないので、とりあえず假説として擧げておく。同様に災を

(3) 『敦煌資料による中國語史の研究』東京、創文社、1988, p. 92ff.

”yan (48) とするもの、炎と混同したものに違いない。炎は云母鹽韻の文字で正例では yam と書かれるべきであるが、このテキストでは云母を ”- で寫し、-m 韻尾を -n で寫す例も見られるから、炎であれば ”yan は滿更あり得ない形ではない。[ts-: 22, bts-: 2, c-: 5, ch-: 1, ”-: 1, s-: 2]

○清母字は合計 5 字 10 例出現するが、その扱いは tsh- と ch- がほぼ相半ばする。しかし前者が正例であることは、齒頭音の系列全體の均衡を考慮すれば明白である。[tsh-: 6, ch-: 4]

○從母字は j-, c-, tsh- などで寫されるものが若干あるが、多くが dz- であることは勿論である。[dz-: 16, j-: 7, tsh-: 2, c-: 1, bc-: 1, jch-: 1]

○心母字は一般に s- で寫されるが、三等韻字の場合は s- 以外に sh- の現われることが間々ある。これは [s] と考えられる心母に對しては決して正確な表記とは言えないが、他の資料にも例がある (NT, DA)。損 kyan (35) はこのままでは説明がつかない。おそらく涓、狷、絹のような同一聲符字の存在による類推音と思われる。ちなみにこれら山攝合口三等字はこのテキストでは必ずしも -w- を付けずに -yan で現われることが多い。[s-: 32, sh-: 7, 'sh-: 1, k-: 1]

○邪母は訟 kung (49), 尋 zhim (42), shin (37) の 2 字 3 例しか用例がない。前者は聲符の「公」を讀んだものであり、後者の對音も正確を缺く。これによって邪母の口蓋化を想定するのは無理で、矢張り正例は z- であると認めるべきである。[zh-: 1, sh-: 1, k-: 1]

正齒音三等

○章母字は c- で寫することが最も多く、j-, ts- を雜える。明らかな誤りは、震 ”u (48), 瞻 tam (47) の 2 字であるが、前者は偏の「雨」を讀んだものと思われ、後者は同一聲符字の「膽」に誤ったものである。[c-: 39, bc-: 2, ts-: 9, j-: 3, ”-: 1, t-: 1]

○昌母はわずかに處 chi (49), 掣 tsher (43) の 2 例であるが、章母との平行を考えると ch- を正例と見做すべきであろう。[ch-: 1, tsh-: 1]

○船母も用例が少ないので、すべての例を掲げると、示 zhi (59), 蛇 zhi (41), 神 zhin (59), shin (26, 45) となり、これらは摩擦音であったことを推定させる扱いである。したがって禪母との合併を考えても不都合はない。[zh-: 3, sh-: 2]

○書母字はほとんどが sh- で寫されるが、釋 sig (38), 深 sim (30) など s- を用いる例もある。これは心母三等字に對して sh- を用いる場合があったのとちょうど逆である。このテキストでは s- と sh- の使い分けがかなりルーズになっているが、大筋でははっきりと區別されている。獸 "yam (41) は不可解な對音であるが、矢張り「艶」などの文字に誤ったものと考えざるを得ない。[sh-: 53, s-: 2, bs-: 1, "-: 1]

○禪母は zh- がほとんどで、無聲の sh- も見える。j- を用いた例も少し見られるが(侍 ji (30), 時 ji (19, 23)), これによって破擦音を想定する必要はまずない。[zh-: 27, sh-: 5, j-: 3]

○日母は大多數が zh- で寫される。時に j- でも現われるのは正例ではなく、日母には摩擦音の /ʒ/ を考えるべきである。すなわち禪母 /s/ とは無聲／有聲で對立し、孃母とは語頭の鼻音成分の有無および摩擦／破擦で對立していたと考えられる。[zh-: 36, bzh-: 1, j-: 3]

正齒音二等

○莊母は諍 tse (49), 詛 tsa (39), 爪 co (41) の計 3 例であり [ts-: 2, c-: 1],

○初母は刹 char (45), chra (40), 叉 che (21), chwe (10) の 2 字 4 例 [ch-: 4],

○崇母は士 shi (04), zhi (07) 1 字 2 例のみ [sh-: 1, zh-: 1],

○生母は所 shei (39), shi (29, 34), 使 zhi (32), 沙 she (02), shwi (01), 生 she (14, 44, 46, 51, 52, 58, 60), 山 shyan (35) の 5 字 14 例である。[sh-: 13, zh-: 1]

扱いの上では對應する正齒音三等諸母と區別がない。ただし、河西方言では正齒音二・三等の間に違いが存在したと考えられるから、このテキストの扱い

のみによって合併を考えるのは早計である。

脣音（重脣音）

○幫母字は都合11字見えるが、多くが p- を用いて寫し、b- による例も存在する。この扱いは、他の無聲破裂音系列の見母、端母の場合と平行していて、特に聲調を顧慮したb-の使用とは思われない。ただその中で「彼」字が合計15例出現するうち14例までが b- で轉寫されているのは、或いは個別に竝母に轉じていたものかも知れない。八を phpuj (60) のような奇妙なかたちを書くのは特殊な例で、何らかの書き誤りとしか考えられない。[p-: 17, b-: 17, php-: 1]

○滂母は、怖字 が phu (15) 以外に po (49), puo (41) と書かれるのを除けば、他の4字7例すべて ph- ('ph-) を用いて寫されている。[ph-: 6, 'ph-: 2, p-: 2]

○竝母は婆 pa (10, 22) 1字2例を除き、すべてがb-で書かれている。[b-: 29, p-: 1]

○明母は、鼻音韻尾を持つ音節には m- を、開音節には 'b- (b-) を用いる。この種の書き分けは音聲的な實質を踏まえてのことで、泥母と完全に平行する扱いである。藐が "wag (61) と書かれているのは例外のように見えるが、これは梵語の三藐 (<samyak) の對音に用いられる文字でチベット文字轉寫資料ではしばしば m- を表記しない。ただし介音に -y- でなく、-w- を用いているのは不可解で、他に例を見ない。['b-: 7, b-: 8, m-: 11, "-: 1]

脣音（輕脣音）

○非母・敷母・奉母は、時に ph- を用いることがあるものの、ほとんどが 'ph- を用いて轉寫している。ph-, 'ph- を用いる點では重脣音の滂母と同じ扱いであるが、'ph- の比率は輕脣音において遥かに高い。このテキストでは輕脣音を區別するため、ことさらに 'ph- を用いたものかも知れない。またこれら輕脣音聲母のあいだには區別が認められず、ともに同じ /f/ であったと考えられる。方 hwo (41) のように喉音字母を用いるものが1例見られるが、これは他の資料にもままた見える。[非 'ph-: 18, ph-: 5, h-: 1, b'ph-: 1; 敷 'ph-:

2; 奉 'ph-: 13, ph-: 1]

○微母は w- 乃至は 'a を前接させた 'w で寫するのが普通である。この扱いからはもはや鼻音要素は看取できず、/v/ に變化していたと考えられる。唯一の例外は勿 'phur (51) であるが、'ph- は先に見たように輕唇音/f/を寫す表記であって、微母には相應しいものではない。或いは同じ否定辭の「弗」に讀み誤ったものかも知れない。[w-: 4, w-: 3, 'ph-: 1]

(附) 子音の前に書かれるb-の問題

このテキストには k-, c-, ts-, zh-, sh-, s- などの子音の前に b- を附け加えた例が見られる。一體に、チベット文字轉寫資料では 'g-, 'd-, 'b- などのように 'a を冠して鼻音性を表現しようとする對音が見られることはすでによく知られた事實であり、このテキストでもややルーズなかたちで行われていた。しかしb-を冠する例は他の資料には全く見えず、何らかの機能を受け持ったものか否かを検討しておく必要がある。まず全ての例を先行音節とともに掲げると以下ようになる。なお括弧内はテキスト中に出現する行數である。

zhim bsi	尋聲 (42)	cug bcung	即從 (58)
myi bku	雲鼓 (43)	she btsun	世尊 (58)
"ing bshi	應時 (43)	"i bcung	有衆 (58)
zhi bku	是故 (51)	dzei bci	在之 (59)
yi btsag	爲作 (52)	shi bzhin	是人 (59)
zhi bku	是故 (53)		

古典チベット語の正書法では、b- 添接字はk, c, ts, t; g, j, dz, d; zh, sh, z, s, r; ng, ny, n など、無聲出氣音字母以外のたいていの字母に添加されるので、上の例のように k, c, ts, zh, sh の前にこれが付けられているのはチベット語の正書法に違反した用字ではない。⁽⁴⁾ではチベット語の音節としては上の bsi.... などは當時如何に發音されていたものであろうか。これに關しては、早くラウファーが唐蕃會盟碑や中國史書に見えるチベット語の漢字音寫形

(4) 稻葉正就『チベット語古典文法學』1971年改訂版, p. 73

によって、當時 *b-* が実際には発音されていなかったことを論じたが、⁽⁵⁾ 尙綺立贊 Zhang Khri-bzang (唐蕃會盟碑)、尙綺立熱 Zhang Khri-bzher (同上)、尙塔藏／尙楊藏 Zhang Stag-btsang (新唐書／冊府元龜)、尙臘藏 (Zhang Lha-bzang) (敦煌寫本 P. 2974)、論頗熱 Blon Rgyal-bzher (新唐書・冊府元龜) など多くの例に見られるように、先行音節を表記する文字に「立、塔、榻、臘、頗」などの *-p* 入聲字が選ばれていることから、前に音節がある場合には *b-* がはっきりと讀まれていたことが分かる。⁽⁶⁾ しかしこのテキストの場合には、先行音節との結合が考えられての對音ではないようである。すなわち、上掲の各字に先行する音節を見ても、一つとして *-p* 入聲字は存在しない。したがって、これら音節に前接された *b-* は実際に發音されたものではないと考えるのが自然である。このテキストの *b-* が何らかの役割を果たしているものとするれば、全く異なったものでなければならない。ところで前加の *b-* は、ラサ方言においてはほとんど聲調に影響を與えないが、方言中には *b-* の有無によって異なった聲調をとる場合がある。たとえばチャムドでは *ca-lag*《物》は [tɕa⁵³ la⁵³] で *ca* が第1聲調になっているが、*bcu*《十》は [tɕo⁵¹] で第2聲調である。同じくチャムドで、*dus*《時》は [du¹³] で第3聲調であるが、*bdun*《七》は [dyn³¹] と第5聲調になる。⁽⁷⁾ しかしこのテキストの例では、平聲が多いというものの上・去・入聲もすべて現われ、特にある聲調を表わしたものとも思えない。同じように陰陽調の違いに關しても顯著な片寄りがあるとは見えない。ちなみに、このテキストを書いた人物は、第62行以下のチベット語祈願文の綴字を見ても、しばしば無用の *b-* を添加する傾向がある。この人物は漢語音節を書き寫す場合にも、すでに実際には讀まれなくなっていた、この種の意味のない *b-* を加えることをしたものと推測される。ともあれ、この *b-* の出現が 42-43, 51-53, 58-59 という計 8 行だけに集中していることも、*b-* の付加が決

(5) B. Laufer, *Bird Divination among the Tibetans*, TP. 1914, p. 102

(6) 現代のラサおよびシガツェ方言でも同じ条件下で、*b-* の發音されることがある。例：ラサ・シガツェ *bcu bzhi* 十四 [tɕu¹ pɕi¹] etc. 金鵬『藏語拉薩日喀則昌都話的比較研究』北京，科學出版社 1958, p. 81ff.

(7) 金鵬，同上書 p. 102 ff.

して組織的な用字ではないことを物語っているように思われる。したがって、このテキストの **b-** は何ら意味のある表音機能を持つものではないと結論してよいであろう。

〔韻母〕

以下、このテキストにおける韻母の表記を検討するに際して、便宜上15の韻攝に分かって見ることとする。まず對音諸形式の出現度数表を出す、その基礎としては中古音の韻類を掲げるものの、十世紀河西方言で合併していたと見られる諸韻は一括して扱い、同方言の音韻形式を表示した。このテキストの場合には、これでも十分に分析に堪えるはずである。明らかな誤りに基づくと思われるもの及び例外的なものには括弧を付した。ハイフンを付けて **-ya** や **-wa** のように示したものは **ya-btags** 及び **wa-zur** を用いた表記で、基字の **ya, wa** を用いたものと一應區別しておいた。また上・去聲は對應する平聲字で代表させてある。

○果假攝

歌	/â/	a: 29, -ya: 1; e: 1, (an: 1, ab: 1)
戈	/ʷâ/	-wa: 4, -wo: 1, o: 1, -we: 1, (-ya: 1, e: 1)
歌三開	/iâ/	-ye: 3, -ya: 1, e: 1
麻三開	/a/	a: 5, e: 1, -we: 1, -wi: 1
麻三	/ia/	a: 5, ya: 2, e: 12, (i: 1)

果假攝の諸韻は以上のような扱いを受けているが、一等韻開口の歌が **a**、同合口の戈が **wa** で現われるのを正例と見ることに異論はないであろう。歌・戈韻に母音 **e** で表わされる例：多 **te** (30), 墮 **de** (34), 火 **hwe** (48) が出るが、これらはこのテキストの諸所に見られる不注意さに歸する以外、説明が困難である。同様に火 **hya** (32) も **-y-** が説明し難い例であるが、**-y-** は或いは **-w-** の書き誤りかも知れない。歌韻に **an, ab** が現われるのは、それぞれ阿耨多羅 **"an lug da la** (61) (Skr. *anuttara*), 可怖 **khav puo** (41) の場合

で、前者が梵語の後続音節 -nu- の、また後者が後続音節 puo に引かれたものであることは疑いなく、例外とすべきである。

歌韻三等の例としては「迦，伽」の2字が現われ、前者が ge (22), gye (10), kya (25) の三様に、後者が2例同じ gye (10, 22) で書かれている。そもそもこの韻類に属する文字「迦，佉，伽」は、梵語音 ka, kha, ga を寫すための専用文字で、そのために他のチベット文字轉寫資料でも、三等介音は表現されないのが普通であった。したがって、このテキストに -y- を用いて寫すのは漢字音として讀んだものに相違ない。迦 kya のように、母音は a で寫すのが正例の筈であるが、実際には e のほうが多い。三等介音の影響で母音がやや前寄りに發音された反映であろうか。

麻韻二等字は a が普通であるが、また e, -wi, -we など現われる。又 che (21), 又 chwe (10), 沙 she (02), 沙 shwi (01) がその例で、ともに聲母が正齒音二等である。これらについては聲母の干涉による可能性を排除し難い。

麻韻三等は実際には「夜，者，蛇」の3字が現われるのみである。e の形が多いように見えるのは、すべて者 ce (8例), tse (4例) の場合である。ここに e が出るのは、三等介音の影響で主母音が前寄りに感じられたためと、「者」が助辭として用いられているために軽く讀まれ、明瞭に發音されなかったという點も考慮すべきである。しかし、他の資料にはこの種の扱いは見えないので、多くの割合はこのテキスト独自の問題として考える必要があるのは勿論である。蛇が zhi (41) のように母音 i になる理由は不明であるが、後続音節「及」gyib に同化されたと見做すことも不可能ではない。

○遇攝

模	/o/	u: 41, o: 2, -wu: 1, uo: 1, (-yi: 1)
虞	/iu/	u: 8, -yu: 5, wu: 13, (o: 1, -yo: 1)
魚	/y/	i: 28, -yi: 4, yi: 1, e: 1, ei: 1, a: 1

模韻は壓倒的に u が多い。この扱いは他の資料と比較すると NT, DA,

P といった河西方言に據った第2のグループに近い。第1のグループには唇音を u で、それ以外を o で、という使い分けが存在したが、第2グループではすべてに對し u を用いていた。普 phyi (61) は後續音節の「門」myin に同化して誤った形である。「普」は他の箇所では phu (48), 'phu (58) のように規則的な形で出ている。

虞韻は u 或いは -yu で寫される。wu はすべて「無」の例である (wu: 9 例, 'wu: 4 例)。雨 lo (43), 雨 lyo (49) は、すでに聲母の項で見たように、「兩」に読み誤ったもので、問題にならない。

このテキストでは魚韻は i, -yi, yi など母音 i で寫され、ほとんど例外がない。これは虞韻との区別の明瞭な點である。この轉寫形のみからすれば、魚韻は /i/ であったとも考えられるが、敦煌寫本の別字異文では止攝開口字(すなわち /i/) と通じるとともに、虞韻とも通じている。また他のチベット文字轉寫資料では、第2類の河西方言によった NT でも i 以外に u でも寫されている點を総合すると、魚韻には /y/ を想定するのが至當である。詛 tsa (39) は母音記號を付け忘れたものとする以外は、説明が難しい。

○蟹攝

咍・泰開	/âi/	e: 12, -ye: 1, o: 2, -ya: 1, e'u: 1, ei: 1, (ong: 1, -yan: 1)
佳開・皆開	/ai/	e: 8, -ye: 1
祭開・齊開	/iai/	e: 19, -ye: 2, i: 3, ei: 1
灰	/*ai/	-wa: 2, o: 3, (on: 1)
皆合	/*ai/	-ye: 1
齊合	/i'ai/	-we: 1, -yu: 1

蟹攝開口は一等から四等まですべて e 乃至 -ye で寫されるのが一般的である。しかしこれによって漢語の韻尾 -i の脱落を想定することは出来ない。むしろ漢語の /AI/ をチベット語の /E/ で解釋したものと見做すのが妥當であろう。他のチベット文字轉寫資料では、O, T, TD などがこの種の扱いをす

る。

一等韻に次のような -y- を用いた形が現われるのは不可解である。害 hye (40), 海 hya (30)。前者は他に 3 回 he と書かれてあるのが正しく、後者も he' (33) がより望まれる形である。「海」はまた 2 回 ho と寫されているが、これも奇妙な形。漢語の一等韻の奥よりの主母音を、チベット語の母音 a よりも o に近いものと見ての轉寫か。ただし筆者のノートには確かに母音 o となっているが、これは或いは ei であったかも知れない。同じ一等韻の「在」はまさしく dzei (59) (dze'i ではなく) と寫している。今寫眞を目にし得ないので、疑いを存するにとどめる。同じく「在」は dze'u (26) とも寫されるが、この種の -i を -u と書くことは NT (及び Long Scroll) の特徴的轉寫法である。ただし NT では一等韻 -a'u, 二等韻 -e'u と區別する。したがってこの一例が NT の轉寫システムに繋がるものかどうかは即斷し難い。宰 song (08), 災 "yan (48) がともに誤讀の例であることは、すでに聲母の項で説明した。

械 hye (38) は二等韻牙喉音拗音化の例と見做してよいものである。拗音化自體は他の二等韻にも觀察されるが、しかしすべての二等韻牙喉音に及んでいないわけではない。蟹攝では合口の「壞」も hye (37) で出ている。

一等合口は -wa 或いは o で寫されるが、漢語の /wai/ を單母音で寫そうとするとこのようになるのは理解しやすい。推 thon (32) は後續音節の落 lag の l- に引かれて -n を付け加えたものとしか考えられない。四等韻合口の「慧」は hwe (47), hyu (47) の二様に寫している。他の資料ではこの字を hywe などと書いてあるが、このテキストでは -y- と -w- を同時に用いるような複雑な表記をしないので、このような結果になったものである。

○止攝

支開・脂開・之・微開	/i/	i: 76, -yi: 14, yi: 8, -ye: 15, e: 4, ei: 1, (yu: 2, yig: 1, yiu: 1, o: 1, ag: 1)
微合	/wi/	yu: 17, -yu: 2, u: 3, yi: 1, -yi: 2, (i: 1)

止攝開口の支・脂・之・微諸韻には區別がなく、ほとんどが i, -yi, yi で寫

されている。それ以外に *-ye*, *e* で寫す例が見られるが、前者はほとんどが彼 *bye* に集中して現われる。(この字は合計15例現われ、13例が *bye* で、他の2例は *pyi*, *byi*)。これはむしろ齊韻に相應しい扱いであり、ひょっとするとこのテキストでは「彼」字は齊(齊)韻に讀まれたものかも知れない。止攝開口字に對しては他の資料にも *e*, *-ye* などを用いることが間々ある。以 *yu* (02), *yiü* (07), 依 *yu* (52) のように *u* が現われる理由は全く不明。他の資料には全然見られない扱いである。以 *yig* (26) の *-g* は後續音節の偈 *gye* に引きずられたもの。同じく之 *co* (16) も先行音節の號 *ho* が影響している。持 *jag* (58) は誤讀の可能性が高い。音からすれば「著」のような字に誤ったものか。

合口に *yu* が多いのは、ほとんどすべて喻母(その多くが「爲」字)の例である。また *-yi* は輕唇音字の非 *phyi* の例であって、ここに合口要素が看取されないのも當然と言える。しかし非はまた一箇所 *phyu* と書かれているが、これは開口字に見られた *yu* と同じくアノマリーの一例である。畏 *shi* (49) は誤讀。

○效攝

豪 /âu/ o: 10, u: 1, (ung: 1)

肴 /au/ o: 1

宵 /iäu/ e: 6, *-ye*: 2, *-yo* 2, *-yo'u*: 1, (*-yi*: 1)

一等の豪韻はほとんどすべてが *o* で寫される。他の資料では普通 *a'u*, *e'u* のような二重母音にするところである。一般にこのテキストでは一貫して單母音で寫そうとする傾向があるが、ここでもそれが顯著である。寶 *pu* (18) は後續音節の珠 *cu* に引かれた形で、この字は他の2例とも正例の *po* と書かれている。遭 *sung* (37) は誤讀。すでに聲母の項で觸れた。二等韻は一例、爪 *co* (41) しか現われませんが、ここでも單母音で寫している。

三等宵韻も矢張り單母音であるが、一・二等の *o* に對して *e* が現われることが多い。これは三等韻では主母音が前寄りになることから理解できる形である。二重母音を丁寧に寫した漂 *phyo'u* (33) はこのテキストではむしろ珍し

い形と言ってよい。

○流攝

侯	/əu/	e: 3, eu: 1, u: 1, i: 1
尤・幽	/iəu/	i: 12, e: 5, -yi: 2, eu: 1, u: 1, u'u: 1, -yeo: 1, (-yam: 1)

效攝と同じように、流攝でも單母音表記が目立つ。二重母音を寫したように見える例、婦 'phu'u (08) は輕脣音化を経て虞（麌）韻に轉じていた筈で、したがって -u'u という表記は單に母音を引き伸ばしただけのことである。これを流攝一般の表記と見做すことは出来ない。同じく兩脣音の牟 'bu (25) も模韻に準じて扱う必要がある。

一等侯韻が e, 三等尤・幽韻が i というのがこのテキストに最も多く見られる扱いであるが、これは他の資料における e'u, i'u に当たる。二重母音を避けるこのテキストでは、それぞれ -u の部分を省略したものである。しかし矢張りいささか單純化しすぎるという懸念があったものか、侯韻にも尤韻にも eu という表記が見られるのが面白い：睽 heu (10), 就 jeu (13)。しかしその場合でも e'u ではなくて eu であるのが注意される（後出の「(附) 母音の重複表記について」を参照）。手 sheo (38) は母音記號 e と o が重ねて書いてあって、或いは o と書いた後、e に訂正したものかも知れない。獸 'yam (41) は誤讀。

○咸攝

覃・談	/ām/	am: 5
合・盍	/âp/	ab: 1, e: 1
咸	/am/	-yam: 1
鹽・添	/iām/	-yam: 13, -yan: 2, am: 2, ywam: 1
業	/iâp/	-yab: 2
凡	/ām/	am: 1
乏	/iâp/	ab: 11, (ag: 1)

咸攝の扱いは單純であって、多くの説明を要しない。まず一等韻は am, 對

する入聲は ab である。答 te (29) は當然 tab が豫想されるところであるが、前後の音節の影響を受けてこのようになったものらしい。二等韻字は唯一「咸」が現われるのみであるが、hyam (36) と拗音化した表記になっている。

三・四等の扱いは -yam, 對する入聲が -yab。「念」は普通正しく nyam と寫す (12例) が、-m でなく -n を使った nyan も 2 例出る。もちろん不注意な音寫であって、-m > -n の變化を考えるには及ばない。鹽 (艷) 韻の「焰」が ywam (49) という風に -w- を伴って書かれるのは、納得が行かない。-y- の誤りかも知れない。凡・乏韻は實際には「梵」「法」の 2 字で、ともに輕唇音化の結果として直音扱いになっている。それを見るため、上表ではこの二韻を別にしておいた。「法」は計 12 例中 1 例だけ phag と書かれている。もちろん不注意な對音と言ってよいが、緡韻の「執」にも -g で書かれた例があり、入聲韻尾一般の弱化が始まっていたかも知れない。

○深攝

深 /iəm/ im: 2, -yim: 4, -yeim: 2, am: 2, -yan: 1, -yin: 1, in: 1

緡 /iəp/ ib: 2, -yib: 6, ig: 1, eg: 1

正例では深韻が im, -yim, 對する入聲の緡韻が ib, -yib と寫される。音 "am (40, 50) は、この字が他の箇所ではほとんど例外なく "im と寫されている (20例) ことを考えると、母音記號の付け忘れなどの不注意な誤りとしか考えにくい。-n で現われる 3 例中 2 例は共に「品」の場合である: phyan (59), phyin (60)。この文字はこのテキストでは他に -m で寫される例がなく、ひょっとすると頭子音との異化によって -m > -n が起こっていたのかも知れないが、即斷は難しい。この字は他の資料では F P にしか見えず、そこでは 2 例正しく phyim と寫されているのも、この假説には不利である。-n を用いる他の 1 例: 尋 shin (37) もあることからすれば、矢張りこのテキスト一般に通じて言えるルーズな對音と考える方がよいようである。緡韻の執 tsig (11), tseg (12) については上にも觸れたが、もちろん正例の cib という形も見えている。

○山攝

寒	/ân/	an: 5
曷	/âr/	ar: 14
山開	/an/	an: 2, en: 1, -yan: 1, -wan: 1
黠開・鎋開	/ar/	ar: 1, -ra: 1
仙開・先開・元開	/iän/	-yen: 19, -yan: 2, en: 6, -yein: 1, -yin: 1, an: 1, in: 1, -yo:1, (-yun: 2)
薛開・屑開・月開	/iär/	-yar: 1, er: 1, -yir: 1, -ye: 1, ug: 1
桓	/wân/	-wan: 33, -won: 1
末	/wâr/	ar: 1, or: 1
刪合	/wan/	-yen
仙合・元合	/iwän/	-yan: 4, -wan: 1, an: 1, wun: 2, wyan: 1
薛合・月合	/iwär/	or: 13, ir: 1, -war: 1, -yar: 1

一等韻開口の寒韻および對應する入聲の曷韻はそれぞれ an, ar で表記され、全く例外がない。二等韻開口も an, ar の筈であるが、また en も現われている：間 ken(48)。ただ、これは他の資料にも見られる扱いである。山 shyan(35)の -y- は口蓋性子音 sh に釣られて出てきたもので、漢語に拗介音があったことを示すものではない。むしろ説明に困難なのは、間 kwan (44) であって、ここには合口を示す -w- の現われる必然性が全くない。或いは後続音節の苦 khu に引かれたものであろうか。

三等韻開口は -yen, -yan, en, an などと寫される。/iän/ に對しては普通の扱いと考えるべきであろう。これらは他の資料でも同様である。言 gyein(58)のように母音記號を重ねて用いる -ei- はこのテキストに特有の表記である。-yin, in など母音 i で表わすのは、臻攝開口字の扱いで、本來はここに用いるべきではないが、他の資料にも例がある。天 thyo (01) は不明。或いは o は ei と讀むべきかも知れない。同じく天 thun (21, 23) は、ともに天龍 tyun lung に對して用いられ、後続音節に同化した形であると判斷される。對應す

る入聲の扱いでは -yar, er が正例で、他はルーズな表記である。特に減 'bug (46) は誤讀の可能性もある。

一等合口の桓韻は -won が一例見えるものの、他はすべて -wan である。對應する入聲は「脱」一字しか現われないが、豫想される dwar ではなく、dor, dar となっているのはやはり若干ルーズな表記である。二等韻合口の例は一つ：還 hyen (39)。これが拗音化を反映するものかどうかは問題である。他のチベット文字轉寫資料では、拗音化はなお合口には及んでいない。三等合口にはやや正確を期した縁 wyan (28) のような對音も見られるものの、普通には -yan か -wan かで、-y- と -w- の兩者を併用する例はない。煩 'phan (49) のように直音のかたちで出るのは輕唇音化を経た形である（入聲の發 'phar (60), 'phwar (30) も同じ）。萬 'wun (60), 怨 wun (50) の2例は母音が u になってしまっているが、或いはこれも隣接音節の影響を考えるべきかも知れない。前者には後に衆 cung があり、後者には前に衆 cung がある。

○臻攝

魂	/wən/	un: 5, in: 1, -yin: 1, -yim: 4, (i: 1, -yan: 1)
沒合	/wər/	ur: 1
眞	/iən/	in: 37, -yin: 5, en: 1, i: 2, (ib: 1, u: 1)
質	/iər/	ir: 5, i: 4, e: 3
文	/iʷən/	un: 1, ung: 1, yun: 1, (myi: 1)
同輕唇音字		un: 2, wun: 3, u: 1
物	/iʷər/	o: 4, u: 2, i: 1, eg: 1
同輕唇音字		ur: 8, or: 1

このテキストには一等開口の痕韻の例が現われないので、その扱いがどのようなものか不明であるが、他の資料では一等開口を in で寫し、同合口を un で寫すのが通例である。したがって、ここでも「門」の一字が例外であるのを除いて、魂韻にすべて un が用いられているのは規則的である。その例外となる門の例は以下のようなものである：myim (01, 02, 06, 08), min (59), myin (60)。

-m は何らかの誤解に基づくものとしても、母音がすべて i であることは、この文字が開口に移っていたことを示すものであろうか。他の資料では門は mun 乃至 mon でしか現われず、唯一 T に一箇所 min が見えるのみであるから、その可能性はなくはない。三等眞韻が in, -yin で寫されるのも極めて典型的な扱いである。眞 jib (46), 震 ”u (48) はともに誤讀の可能性が高い。入聲の質韻で -r が落ちている例はすべて「一」である。このテキストでは「一」が ”ir と正しく書かれるのは一例のみで、他の 5 例はすべて -r を落としている。「一」は「十」と同じく、平聲に讀む習慣があったと思われる。

文韻（および入聲の物韻）は輕脣化韻であるから脣音字は直音化していたと考えられる。今、上表ではこれら輕脣音字を別出させた。その扱いは他の資料にも見られるように、un という形をとり、一等韻合口に合流したものらしい。文（物）韻所屬字は輕脣音以外の文字がむしろ少なく、軍、雲、不の 3 字のみである。軍は kun (01), gyung (49), 雲は yun (48), myi (43) の形で出る。雲 myi は誤讀としか考えられないが、gyung の -ng は -n とすべき所を不注意で -ng に誤ったものであろう。

○宕攝

唐 開	/ɔ/	o: 8
鐸	/ək/	ag: 14, eg: 1
唐 合	/ʷɔ/	-wo: 1, o: 2
陽 開	/iɔ/	o: 10, -yo: 1, yo: 2
藥 開	/iək/	-yag: 2, ag: 2
陽 合	/iʷɔ/	o: 6, -wo: 1

宕攝における -ng 韻尾の脱落は、第 2 類のチベット文字轉寫資料すなわち河西方言を基礎とするものに特徴的な現象であった。このテキストでもこの特徴はきわめて明瞭で、一等唐韻は開口が o, 合口が -wo または o, 三等陽韻は開口が o, -yo, yo, 同合口が o, -wo と全く規則的な表記を受けている。

入聲は開口字の例しかないが、一等鐸韻 が ag, 三等藥韻が -yag（口蓋性の

チベット文字の後では ag) と矢張り規則的な扱いである。唯一の例外は作 ceg (24) であるが、この字は他の箇所では正しく tsag (18), btsag (52) と寫されているので、不注意な誤りと見るべきであろう。

○江攝

江 /əŋ/ ang: 1

覺 /ək/ ag: 1, -wag: 1

江攝字は数少ないので全例を示すと、降 kjang (43), 電 bag (43), 藐 "wag (61) の3字である。一般にチベット文字轉寫資料では、江韻字は ang, 入聲覺韻は ag と書かれるのが普通であることからすると、上記のうち先ず電 bag の扱いは規則的と言える。降 kjang は聲母(見母)の項でも觸れたが、ひょっとすると kyang かも知れず、その場合は拗音化の例に数えられるものである。藐 "wag もすでに觸れた通り、梵語「三藐」を音寫するための文字で、普通には yag で現われるが、ここで -w- が用いられている理由は不明である。或いはこのような訛音が存在したものかも知れない。

○曾攝

登開 /əŋ/ ing: 5, eng: 6, ib: 1, -yang: 2, e: 1

德開 /ək/ ig: 5, eg: 10, eig: 1, e: 1

登合 /ʷəŋ/ ong: 1

德合 /ʷək/ og: 5, ug: 3, o: 1

蒸開 /iəŋ/ ing: 4, -ying: 1, in: 7, i: 3, im: 1

職開 /iək/ ig: 22, -yig: 1, eg: 4, eig: 1, e: 6, ug: 1, (-yen: 1)

一等登韻開口及び同入聲德韻は ing, eng (ig, eg) という表記が大部分である。他の資料、特に第2類の資料では ing (ig) がほとんどを占めていたが、このテキストでは eng, eg も相當數に及んでいる。ともあれこれは扱いの差であって、漢語の /əŋ (ək)/ を寫したものであることは間違いない。能 nib (33) は或いは ning と讀むべきものかも知れない。間違いが起り得ない字形ではない。nib ではいかにも奇妙な形である。能 nyang (31, 52) は2例現

われるので、明らかに意圖的な對音である。ning では /iəŋ/ を表現し難いと判断して -ya- を用いたものと思われるが、一等登韻を表わすには決して適当な表記とは言い難い。肯 khe (19) は -ng が脱落しているが、寫本ではこの音節の後に漢文に相當部分のない dang が補ってある。轉寫テキストでは dang としておいたが、da- と -ng の間には僅かなすきまがあり、da nga という2字が書かれているようにも見える。その場合は後の ng を khe に繋げて keng を意圖したと考えることも不可能ではない。

登韻合口の例は一字だけ見える：弘 hong (30)。もともとこの位置に来る文字は數少なく、他のチベット文字資料には全く現われないので、チベット文字資料の扱いを知るうえでは貴重である。ちなみに「弘」はコータン文字による金剛經には現われて hvūm: と書かれている。入聲德韻の合口は、この ong に平行して og または ug で書かれている。他のチベット文字資料はほとんどが og で ug は見えない。通攝との區別はあったに違いないから、その點を考慮すれば ong (og) のほうを正例とすべきであろう。三等の蒸・職韻は開口しか現われないが、ing (ig) が普通の扱いである。例外として、in で寫されるものが7例あり、すべて應 "in の例である。この字にはまた "ing という正例が3例のほか、"i が3例、"im が1例現われている。蒸韻と眞韻の通用は敦煌寫本の別字異文に見え、他のチベット文字資料でもなくはない。このテキストのルーズな對音一般を考慮すれば、蒸韻のような前寄りの調音をとる場合に起こりやすい誤りと考えられる。正例の "ing という形もある以上、眞韻に移っていたと考える必要はない。入聲では例外的な對音に即 cug (58) があるが、これは後續音節の從 bcung に引かれた形と見られる。

○硬攝

庚二開・耕開	/äi/	e: 9, -ye: 2
陌二開・麥開	/äk/	eg: 2, eig: 1, ig: 1, (-yu: 1)
庚三開・清開・青開	/iai/	e: 17, -ye: 5, i: 3, -yi: 1, -yin: 1
昔開・錫開	/i'äk/	ig: 1, i: 1

梗攝は宕攝と同じく、河西方言において -ng 韻尾を脱落させることで知られている。今このテキストの扱いを見ると、唯一の例外（明 myin (48)）を除いて、すべて e 乃至 -ye などの形で現われているのは、NT, DA, P などの第2類資料と同じ扱いである。三等韻には i, -yi が現われることもあるが、少数にとどまっている。正例では母音はあくまで e と考えるべきであろう。例外「明」は、NT, DA, P でもすべて mye で寫されていて、ここで myin となっている理由は不明である。

入聲は他の資料でも、二等が eg, 三等が ig という傾向があり、このテキストの扱いもほぼ同様である。厄 'gyu (44) は、この文字の他の箇所での扱い "ig (52) と比べて、誤讀の可能性が極めて高い。

○通攝

東一	/uŋ/	ung: 6, ong: 2
東三・鍾	/iuŋ/	ung: 27, -yung: 2, u: 1
沃	/uk/	ug: 2, og: 1, o: 1
屋三	/iuk/	ug: 2, og: 2, u: 1
燭	/iok/	og: 3, -ywag: 2, -yag: 1

上表の扱いからは東一に /uŋ/, 同東三・鍾に /iuŋ/ を想定して何の矛盾もない。對應する入聲も ug または og で寫されていて、主母音に違いのなかったことを想像させる。しかし鍾韻の入聲に当たる燭韻では扱いがかなり異なる。つまりここでは ug が現われない代わりに、og 或いは -ywag, -yag などの扱いを受けている。これは他のチベット文字資料とも平行するところで、舒聲において東三・鍾が合併していたのとは異なり、燭韻が屋三と一線を畫していたことの反映である。

（附）母音の重複表記について

これまで見てきたように、このテキストには二つの異なった母音記號をチベット文字の同一基字の上に付けるという特異な表記が現われる。これは他の資料にも散発的に見られるものの、このテキストにおけるほど多量には現われな

い。これらの重複表記の実體が如何なるものかについて、この場を借りて整理しておこう。このテキストの母音記號重複表記はおおまかに2種に分けることが出来そうである。

まず第一は他の資料では 'a を挿んで二重母音表記すべきところを、二つの母音記號を基字に押しつけてしまうというもので、在 dzei (59), 誓 shei (30), 朕 heu (10), 就 jeu (13), 手 shyeo (38) がその例である。これらは、もし他の資料であれば、それぞれ dze'i, she'i, he'u, je'u, shye'o などと書くところで、このテキストではこの種の二重母音表記も極めてまれに使用するが、普通には用いない。ただし、dzei, shei.... などの重複表記も決して多數を占めるわけではなく、本来正確な音寫には二重母音表記が必要な場合（特に效攝・流攝）にも單母音表記がなされているわけで、それだけに漢語の音韻實質を推し量るうえでは注意が必要となる。

もう一つの種類は -ei- の形、すなわち母音記號 e と i とを重複させる場合に限られ、次のような例が見られる：施 shei(16), 言 gyein(58), 金 kyeim(12), 德 teig(13), 即 tseig (36), 百 peig (18)。これらは第一の場合とは異なり、もともと二重母音表記がなされるべき韻類ではない。むしろこれらの出現の環境は、チベット文字表記に当たって i 或いは e がともに出現していて、寫本の筆者がどちらを書くべきか迷った末の重複表記であると思われる。たとえば施は止攝開口字で i 表記が一般的であるものの、sh や zh などの場合に e が現われることが多く、現にこのテキストでも「施」字のもう一つの例は she と書かれて⁽⁸⁾いる。より明らかな例は「即」字の場合で、この字は tsig とも tseg とも書かれており、tseig の表記が兩者の間の搖れを體現していると見られる。漢語の /iæm/, /iæk/, /iæŋ/ などの /iæ/ の部分はチベット語の5母音システムで寫すのには困ったに違ひなく、このような表記は一種の折衷の試みであったと考えられる。最後に、轉寫テキストには現われていないが、一旦 -ei- と重

(8) 『敦煌資料』p. 129

複表記をした後で、e を消しているような例もあるのは興味深い事実なので付け加えておく。(第19行、此 tshei>tshi, 同、受 shei>shi)

以上、聲母・韻母に分かってこのテキストの表記をひとわり眺めた。チベット文字で轉寫された資料の二分類からすると、このテキストは河西方言に基づく第2類の資料であることが明瞭である。現在知られている第2類の資料、たとえばNT, DA, Pそれにロンドンにある「長卷」(Long Scroll)などは、10世紀の歸義軍期の産物であり、筆者が前著で示した時代観⁽⁹⁾によると、これもまた10世紀のものということになるが、そう判断するには若干躊躇すべき幾つかの徴證がある。その一は緒言でも觸れたように、書寫に用いた紙が盛唐期の寫經の反故である點で、このテキストが10世紀のものなら、相當に古い紙を利用したことになる。ありえないことではないが、少し不安が残る點である。第二はテキストの對音そのもので、全體の特徴は勿論河西方言を反映したものであることは確かであるが、見たとおり、一々の表記の仕方が相當獨特のものであって、少なくともNT, DA, Pなどとは表記の傳統を異にする點である。同時代のものとすれば異なった社會的背景を前提としなければならないであろう。第三は末尾に置かれたチベット語の歸敬文である。10世紀においても敦煌ではなおチベット語が使用されていたことは確かであるが、チベット文字轉寫漢文資料の中では、この種の後書きをつけたものは9世紀に屬する第1種資料にしか存在しない。これらの諸點は10世紀であることを眞っ向から否定するような性質のものではないが、氣になる點として挙げておく。

このテキストには、字形が似ているために讀み誤ったものや、偏旁からの類推による誤り、また前後の音節に引きずられての誤り等々、實に多くの種類の間違いが登場している。また一貫した規則によって表記しようとする姿勢は弱く、その場限りのかなりルーズな表記が目につく。したがって個々の對音例を漢語音韻史の材料としてシリアスに受け取ることは非常に危険である。しかし

(9) 『敦煌資料』p. 186

一面では、ルーズな表記では、チベット文字で漢語を寫す場合にどの程度の可能性があるかを測定するうえでは役に立つかも知れない。とくにチベット語寫本に出現する漢語語彙を復元するような時には、この種の外延を考慮しておくのが望ましい。

六 チベット語歸敬文

第二節のテキストでは省略した62行目以降のチベット語による歸敬文をここに附載する。正書法上の混亂が甚だしく、通讀に著しい困難を覚える。テキスト中に挿入してある(=.....)の部分は、可能なかぎり読み替えた形であり、⁽¹⁰⁾譯文はその読み替えた形にしたがって解釋したものである。

[テキスト]

- 62 // bla ma 'i bla ma dkon mchog gsum // che ba'i che ma mchog
dbang mchog dampa'
- 63 gus par phyags 'tshal dad ba skyeb gsum (=skyab su) mtshi 'o //
bnam sa'i ngam btag (=rnam dag) skye drgu (=dgu)
- 64 lo (=long) spyod bzhi // stan chos kye (=kyi) mgon ma dzad cin
(=cing) // ston pa dam pa chos kye (=kyi) mgon (=mgon) mdzad
- 65 // mtshangs pa rgyal byin (=brgya byin) rgyal cen (=can) lha
dang gklu (=klu) // gnod byon (=sbyin) dri bza lto phyi (=phye)
lha ma yin // gser 'dab gru 'bu
- 66 myi 'am ci la bsog (=sogs) // sems cen (=can) gang bdag (=dag)
bte bsheg (=bde gshegs) sra nam ci // nor bu pun gsum (=phun
sum) dpal
- 67 bjer (=rjer) kun bson (=gson) cig sangs rgyas bcom ldan 'das kyis
(=kyi) yon tan bas myi khyeb (=khyab) / dam pa chos kye (=kyi)

(10) 譯文の整形と翻譯には武内紹人氏の全面的な協力を得た。特に誌して感謝する。ただ若し誤りがあるとすれば、それはすべて筆者の責任である。

/ 'phags

- 68 pa'i drge bdun (=dge 'dun) yon tan bas myi khyeb (=khyab) / /
rnam smyin bla na myed ba'i (=pa'i) yon tan bas myi khyeb
(=khyab) / /
- 69 skal pa (=bskal pa) bye ba khug khyig (=khrag khrig) grang par
/ / kon (=dkon) mchog tshan (=mtshan) tsam yang rnyed ka
(=dka) ba lan cig khrom
- 70 ldan lu (=lus) rnyed yang / / ca dzun (=rdzu) 'phrul dam pa 'dus
shags tsam / / zo (=jo) mo rgyal ba ka (=kha) la kon (=kun)
bson (=gson) cig
- 71 na mo bud ya / na mo dar ma ya / na mo sang 'ga ya / na mo
dad na dra "a ma / na mo wwa ga wwa bte / pa sang kra ma ti
shud ma dnya na ya di
- 72 pa di ya swa hwa / /

[譯 文]

最勝にして最勝なるもの三寶，偉大にして偉大なるもの勝根に，謹んで敬禮し奉り，信心もて歸依し奉ります。

天地の清淨なるもの・衆生・四受用，しかして法の保護をなし給い，聖師（佛）の法を保護したまい，梵釋（梵天・帝釋），四王，天龍，夜叉，乾闥婆，摩睺羅伽，阿修羅，迦樓羅，鳩槃荼など，一切衆生が解脱すべく，常になべての財物を有する有徳の主に耳を傾けたまえ。

佛世尊の功德によって満たされず，聖なる法の功德によって満たされず，聖なる僧團の功德によって満たされず，無上の應報の功德によって満たされない，千萬一億の数に及ぶ劫では，三寶は名だけでも得がたきもののなのに，萬に一つ（？）の身を得し，聖なる神通者たる女後の言葉に耳を傾けたまえ。

南無佛，南無法，南無僧，南無三寶，南無世尊，〔.....〕菩提莎婆訶！⁽¹¹⁾

結 語

本誌の前號に前半部分を載せてから、一年のうちに、ソビエトが解體してレニングラードもサンクト・ペテルブルグと舊稱に復した。本來なら小文の題名も變更すべきであるが、これは續篇でもあり手を觸れずにおいた。したがってレニングラードという名稱を用いることに他意があるわけではない。またこの寫本の寫眞を提供して呉れるよう東洋學研究所に申請していたのに對しては、1991年8月2日付けの手紙で正式に拒否された。理由はモスクワのサフロフ教授が以前よりこの寫本を研究しており、公刊を希望しているからというものである。我々は同教授の仕事が一日も早く完成して、寫本の全貌があきらかになることを心から望むものである。その時には、手控えのノートに據った筆者の杜撰な報告は全く無用のものとなるに違いない。

最後に小文は平成三年度科學研究費（一般研究C）「十世紀敦煌言語生活史の研究」および三菱財團による同年度の助成「中央アジア發現寫本による多言語社會の研究」による研究成果の一部であることを附記する。

(11) 南無佛から南無世尊までは *namo buddhāya, namo dharmāya, namo saṃghāya, namo ratnatrayāya, namo bhagavate* と分かる。敦煌チベット寫本のサンスクリットとチベット語の對譯佛敎語彙集 (P.t. 849) では、その最初に同じく三寶に歸依する語が挙げられている。ちなみにそのチベット語部分の綴字は以下の如くで若干異なっている；*na mo 'bu tha ya', na mo dar ma ya', na mo sang ga ya', na mo rad na tra ya ya'*。Joseph Hackin, *Formulaire sanscrit-tibétain du Xe siècle* (Paris, 1924) の該當箇所を参照。それ以降「.....」の部分は不明。ただ *dnyana* は多分 *jñāna* であろう。上記 P.t. 849 ではサンスクリットの *jñā* は、*g-kyā, 'g-kyā, ya, 'gyā* (語頭), *g-nyā* (語中), *d-nyā* (語末) などと複雑な表記を受けている。このテキストの例は語末位置にないが、P.t. 849 の語末の表記法に一致する。また最後の部分は *bodhi svāha* で問題なかろう。

前號に對する正誤表

	誤	正
p. 15 左欄下から 7 行目	51, 52	51, 53
p. 17 左欄下から 5 行目	52	53
p. 18 左欄下から 11 行目	dang 19	この項削除
p. 18 左欄下から 6 行目	52	53
p. 18 右欄上から 5 行目	du 03	この項削除
p. 19 左欄下から 4 行目	52	53
p. 21 右欄上から 4 行目	52, 60	53, 60
p. 22 右欄上から 3 行目	44, 52	44, 53
p. 23 右欄下から 7 行目	50, 52	50, 53
p. 25 右欄下から 4 行目	此	削除
p. 26 左欄下から 15 行目	52	53
p. 27 左欄上から 2 行目	52	53
p. 27 左欄上から 14 行目	功	削除
p. 27 左欄上から 18 行目	51, 52	51, 53
p. 27 左欄上から 19 行目	故	削除
p. 27 右欄上から 5 行目	50, 52	50, 53
p. 27 右欄下から 8 行目	或	削除
p. 28 左欄上から 2 行目	ji 2	削除
p. 28 左欄下から 2 行目	盡	削除
p. 29 左欄上から 1 行目	52	53
p. 29 左欄上から 10 行目	44, 52	44, 53
p. 29 右欄下から 12 行目	念	削除
p. 29 右欄下から 3 行目	畏	毘
p. 31 右欄上から 1 行目	52, 60	53, 60
p. 32 右欄下から 12 行目	26, 29, 47, 52	26, 29, 47, 53
p. 32 左欄下から 2 行目	降 kjang 43	この項 p. 28 左欄下から 14 行目に移す
p. 33 左欄下から 9 行目	52	53
p. 33 右欄上から 2 行目	雨	〔雨〕
p. 33 右欄上から 3 行目	雨	削除
p. 34 右欄上から 3, 4 行目	執.....	この項 p. 34 左欄最後に續ける